



鹿の角がもつ再生観念について：
スキタイ、戦国楚墓、馬王堆漢墓をつなぐもの

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-07-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大形, 徹 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004368

鹿の角がもつ再生観念について —スキタイ、戦国楚墓、馬王堆漢墓をつなぐもの—

大 形 徹

はじめに

中国の「鹿」の図像に関しては、吉祥文様の立場から、「鹿」と「禄」の発音の類似より、「禄」を得ることと結びつけられることが多い。その関連の図像も数多くある。たとえば『中国吉祥図案¹⁾』には、福祿寿三星という題のもとに「鹿」がえがかれ、同種の趣向のものがいくつか紹介されている。たしかに、その説明はわかりやすい。しかし、それらは「鹿」と「禄」の発音の問題としてのみ理解されていて、かえって「鹿」の図像そのものには何の言及もされていないのである。

「鹿」の図像は、まだ国家も形成されていないような古い時代から数多くある。当然のことだが、中国だけとは限らない。中国の古い時代の「鹿」が「禄」と結びつけられているとは思えない。スキタイには「鹿」の図像や造形が多いが、中国以外のものに関しては漢字の発音の類似の観点からの解釈は意味をなさない。

新石器時代の「鹿」を狩る図²⁾は狩猟の成功を願ったものであろう。しかし、獲物としての「鹿」以外にも、「鹿」はその「角」に関して特別な意味を付与されていくようになる。

角が生えるのは「鹿」の雄であるが、トナカイだけは雌も角を持つ。角は「雙角アリテ、枝、多く、年年、夏ニ落チテ再ビ生ズ³⁾」とあり、『礼記』月令には、十一月に「麋角解（麋角解す）」、五月に「鹿角解（鹿角解す）」とみえ、「鹿」の角が落ちることが意識されている。日本の「鹿」の場合は四月頃に前の年に生えた角が落ちる。落ちた角を、こぼれ角、落ち角と呼ぶ。そのあとすぐに生えてくるが、それを袋角⁴⁾（図版 0-1）と呼ぶ。九月ぐらいに袋角の皮が剥けて、しっかりとした角になる。落ちる⁵⁾（図版 0-2）たびに角は大きく生え変わり、五年目で四尖の角へと成長し、完成形となる。

ニホンジカでは四尖の角は、普通三歳以上のシカにだけ生える。角は当歳のシカにはなく、一歳では瘤状、二歳になってはじめて長い棒状の角になる。しかしこの角

には枝がない。三歳以上の角は枝の数が不規則だが、普通は三歳が二尖、四歳が三尖、五歳が四尖である。しかし六歳以上でも普通は四尖で、これ以上はめったに枝が増えない。そのため四尖の角がニホンジカの正常型と見なされているのである⁶。

どの「鹿」⁷（図版 0-3）」も毎年、角が生え変わるが、そのことに復活再生の力を見たのであろう。おそらく、そのことが「鹿」が重要視される最大の理由であらう。

林俊雄氏はスキタイの墓葬、バジリク 1 号墳出土の馬が「鹿のような角の頭飾り」⁸（図版 0-4）」をつけることを指摘し、

スキタイ美術では、鹿は最も頻繁に登場する動物モチーフではある。鹿の特徴は何かといえば、それはまず大きな角にある。そして、その角は生え変わる。つまり再生を意味するのだ。死後の世界への旅立ちには、鹿に先導してもらいたい。しかし鹿に馬具を着けることはできない。そこで馬に鹿の扮装をさせたのであろう⁹。

と述べている。

「鹿」の角のもつ再生復活観念が墓葬に影響し、被葬者が再生復活することに影響していると考えているのである。スキタイではミイラが作られた。エジプトのものとは方法が大きく異なるが、それは死後に肉体をともなって復活することを希求してのものである。

湖南省の馬王堆一号漢墓の棺にみえる「鹿（図版 5-3）」はバジリクの死者の背中の中に入れ墨の文様や「鞆の飾板（図版 1-4）」の「鹿」とよく似ている。バジリクのは口の部分が猛禽類の嘴に似ており、グリフィンといってもよいかもしれない。振り返るように頭を後ろに向け、後ろ足を跳ね上げている。そして全体が円の中におさまるように造形されている。これに似た造形は中央アジアには多く見ることができる。このことによって前漢時代の馬王堆の造形は中央アジアの造形の影響を受けていると推測しうるのである。

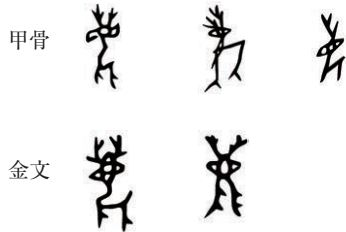
遊牧系、狩猟系の人々が居住していた中央アジアと中国の南の方で湿潤な地域である湖南省とは気候や文化もまったく異なる。それにもかかわらず、「鹿」の文様に共通性があるのは驚くべきことである。けれども馬王堆帛画のカラスや蟾蜍、扶桑などは、じつはさらに遠く離れたエジプトの、隼、スカラベ、造形と共通する要素をもっているのである。¹⁰

『中国動物図譜』獣類¹¹、偶蹄目、鹿科には、獐・赤麂・小麂・黒麂・毛冠鹿・水鹿・

梅花鹿・白唇鹿・馬鹿・坡鹿・麋鹿・狍・駝鹿・馴鹿などが紹介されている。

一、鹿の文字のもつ意味

ここでは、まず甲骨文・金文の形から解き明かす、白川静の『字通』から紹介したい。白川は、甲骨の例を三例、金文の例を二例あげている。



いずれも大きな角がつけられている。ただし、その「鹿」の角は中央アジアや北方に棲息するヘラジカやトナカイのようにはみえない。

〔象形〕鹿の形。〔説文〕十上に「獸なり。頭角四足の形に象る。鳥鹿の足は相ひ比す。比に従ふ」（段注本）とするが、比は鹿足の形で、相比する意ではない。卜文に鹿頭刻辞があり、また彝器（いき）に鹿頭・鹿文を文様として用いるものがある。〔詩、大雅、靈台〕は周の神都辟雍（へきよう）のさまを歌うものであるが、神鹿の遊ぶことが歌われている。祿（禄）・麓（ろく）と音が通じ、その意にも用いる。

→祿

〔訓義〕

1. しか。
2. 帝位にたとえる。
3. 禄と通じ、さいわい。

…

〔語系〕鹿・祿 lok は同声。「鹿を逐う」とは、もと天禄を追い争う意であろう。

二、鹿の画像のもつ意味

『中国古代の肖形印』の中に、「鹿」に関する印と関連する画像が集められている。そこに簡潔な説明がつけられているので、紹介しよう。

鹿の画像はるか新石器時代にすでに現われ、西安半坡出土の彩陶盆には鹿紋が描かれている。商代の玉石工芸品の中にも玉の鹿がある。秦・漢の画像に見えるものは更に多い。秦代の瓦当・漢代の石刻・磚刻・陶塑などには、みな鹿の造形があり、特に鹿の角の処理はこれ以上美化しようがないほどにまでしている。漢代の人々は鹿を瑞獣としていた。『詩経』に「呦呦たる鹿鳴」とあり、鹿を「有徳之召」としている。また古くは「鹿は楽なり」ともいい、後の人は意味を推し広めて「鹿来れば禄至る」とか「鹿至りて慾止む」などといって、これに封建社会の倫理や道德観念を加えている。このような鹿印は、当時の吉祥のために通用した印なので、広範に伝わり、それで残ったものもかなり多いのである¹²。

「鹿」については、その音通が「楽」からはじまり、その後、「禄」になったという。ただし、「楽」と発音を通じるというのは、以下の発音の簡単な表にみるように疑問である。「禄」に関しては完全に同じである。

	『唐韻』	『集韻』	『韻会』	『正韻』
鹿	盧谷切、 音禄	盧谷切、 音禄	盧谷切、 音禄	盧谷切、 音禄
楽	盧各切	歴各切、 並音洛喜 楽也	歴各切、 並音洛喜 楽也	歴各切、 並音洛喜 楽也
禄	盧谷切、 音鹿	盧谷切、 音鹿	盧谷切、 音鹿	盧谷切、 音鹿

「禄」は白川静の『字統』は「〔説文〕一上に「福なり」、〔広雅、釈詁〕に「善なり」とみえる。天より与えられる福善をいう」と記す。「福」「善」の意味である。

ここで、新石器時代以来の画像の例から上げているのは興味深い。この時代から、このような音通による吉祥観念があったとは考えられない。まったく異なった観念が働いているはずである。

「秦代の瓦当・漢代の石刻・磚刻・陶塑などには、みな鹿の造形があり、特に鹿の角の処理はこれ以上美化しようがないほどにまでしている」の記述は示唆的である。「角」が美化されているという。これは、「角」に意味があり、それを強調しているとみることができる。

三、イラン・スキタイの鹿

中国以外にも「鹿」の棲息している地域は多くある。それらの地域には中国以上に「鹿」

の図像などが残されている。ここでは、それらの図像を紹介するとともに、そこにどのような観念が付されているのかについて考察したい。

イラン

「鹿形水注¹³（図版 1-1）」には、「遊牧騎馬民族の人々は、日常的に接している動物たちに対し親近感を持つとともに畏怖の念をも抱き、動物意匠を道具や装身具などにつけることにより動物が持つ底知れぬ力を身につけようとした。これは様式化されてはいるがみごとに角を持った鹿を象った土器で…」とみえ、イランにも「鹿」の造形があったことがわかる。「彩文馬飾浅鉢¹⁴（図版 1-2）」は真ん中に馬が描かれ、皿には四頭の「鹿」が描かれている。

スキタイ

「鹿型飾板¹⁵（図版 2-2 と同一のため、そちらを参照）」「革帯の飾板（図版 1-3）（2 点¹⁶）」は「横たわる鹿を側面から表した飾板。鹿は胴を右または左に回転させ、身体の両側面を見せている」とされる。「鞆の飾板¹⁷（図版 1-4）」には、「細長い枠の中に大鹿を透かし彫りにした鞆の上部の飾板である」とされる。「鹿形装飾品¹⁸（図版 1-5）」は「銀製の枝状の角を持った金製の鹿の頭部（A.M. レスコフ）」とされている。「絨毯¹⁹（図版 1-6）」には、「動物闘争文と猛獣が偶蹄類を襲うモチーフの起源は、スキタイ時代の南シベリア芸術と関係がある。中国製の多色の絹織物で縁どられている。（E.I. ルボ・レスニチェンコ）」とされている。これは、ノイン・ウラのもので、「匈奴の芸術品」とされているが、スキタイと中国が匈奴で結びついたものとなっている。ヘラジカのような「鹿」とグリフォンが描かれている。

グリフォン頭部形竿頭飾²⁰（図版 2-1）

竿頭飾は、嘴を大きく開いて鹿の頭をくわえたグリフォンの頭部の彫刻である。頭部は一枚の板に刻まれている。グリフォンの顔に付いている両翼、立っている耳と鹿の頭から上に伸びて、雄鶏の頭の形をした九つの枝に分かれた大きな角——これらはすべて厚い革を切り抜いたものである。この竿頭飾には、古代アルタイ芸術にたいへん広く普及していた主題—動物の闘い—が表現されているが、この主題は、極めて独創的に解釈され、まるで省略的表現法のように、ただ動物の頭部だけで描写されている。古代原住民は、餌食を食り食うこの場面では、強者が餌食のさまざ

まな素質を自分に取り込んで、自ら変身する、と考えていた。従って古代アルタイ人の芸術においては、有蹄動物の角をつけた猛獣の姿がしばしば見られる。その他にも、弱肉強食の場面は、破滅・死滅・餌食の犠牲を通して生じる、宇宙進化論的な創造と復活の行為と考えられた。(L.B.)

「鹿」の頭には「雄鶏の頭の形をした九つの枝に分かれた大きな角」がついている。ここは、グリフォンが「鹿」の頭に齧りつき、むさぼり食おうとしている様子である。「古代アルタイ芸術にたいへん広く普及していた主題—動物の闘い—」と記されているが、一般には、動物闘争文と呼ばれているが、その意味については、「餌食を貪り食うこの場面では、強者が餌食のさまざまな素質を自分に取り込んで、自ら変身する」、「弱肉強食の場面は、破滅・死滅・餌食の犠牲を通して生じる、宇宙進化論的な創造と復活の行為」とされている。これらの図像は、変身や復活と結びつけられているが、それは死後のことであろう。

鹿紋章盾飾り²¹ (図版 2-2)

高浮彫の鹿の像は、スキタイ工芸美術の卓越した作品…鹿のポーズは規範に則っている。足を折曲げ、背中全体を覆う角のある頭を持ち上げ、…一連のリズミカルに反復する巻毛のように描写された鹿の角の風変わりな表現は…スキタイ芸術の代表的な動物意匠は、宇宙の力や自然現象を具現化した神の象徴である。スキタイ人が崇拝した動物意匠で装飾されたものは、その持ち主を不幸や災厄から守ってくれる厄除けのお守りや護符であった。(L.G.)²²

鹿に限らず、動物意匠の意味に関して「宇宙の力や自然現象を具現化した神の象徴…厄除けのお守りや護符」と理解されている。

鹿半身形竿頭飾²³ (図版 2-3)

この竿頭飾は、前脚と高い枝分かれした角、長い鼻づら、立った耳のある鹿の半身像の形をしている。角と首には鈴を下げる三つの輪がついている。鹿半身形竿頭飾は、宗教儀礼に用いられたと見なされている。それは木の竿の先に飾られていた。物を差し込む部分であった胴体には、木片が残っていた。恐らく、この竿頭飾は、

何らかの荘厳な儀式に飾られたものであろう。古代には鹿の形象は、太陽の象徴であった。(Ya.D.)

ここでは、「鹿の形象は、太陽の象徴であった」とされている。太陽は復活再生の象徴であるが、「鹿」の角にも同様の意味があるため、「鹿」と太陽が結びつけられたのかもしれない。

鹿形竿頭飾^{*24} (図版 2-1)

厚く堅い革を切り抜いた角は、故意に誇張されている。…古代アルタイ人の同族インド・イラン系種族の神話によれば、各神は幾つかの動物に姿を変えることができた。例えば、太陽は、ある時は飛翔する鳥、ある時は黄金の角の鹿、ある時は疾走する馬に変身すると考えられたのである。シベリアの原住民は、大昔から、鹿の枝分かれした角を、世界の樹の象徴と見なしてきた。(L.B.)

ここでも、「太陽は、…ある時は黄金の角の鹿…にに変身する」とされ、またシベリアの世界樹と鹿の角を結びつけている。

絨毯断片 2 点「フェニックス」「スフィンクス」^{*25} (図版 2-6、2-7)

…空想の怪物（ライオンの体と人間の頭をした怪物で、獣の耳と様式化された大きな鹿の角を持つ）が描かれている。スフィンクスの背に、羽を広げた豪華な翼が生えている。様式化された鹿の角に似た尻尾が、両脚の間から突き出ている。

別の断片には、不死鳥フェニックスが描かれている。不死鳥の尻尾の羽は装飾文様化され、羽根の一枚は、その先が蓮のつぼみと花の形をしている。…

ここでは、スフィンクスとフェニックスが、あわせて紹介されている。スフィンクスの頭には、「大きな鹿の角」があり、また「様式化された鹿の角に似た尻尾」もついている。フェニックスの「羽根の一枚は、その先が蓮のつぼみと花の形をしている」とされるが、「蓮」はロータスのことで、いわゆるパルメット文様に通じる復活再生を意味する文様である。この文様はフェニックスの下にも連続文様としてあらわされている。

以上、イランとスキタイの例をみたが、「鹿」や動物闘争文には復活観念が込められ

ており、「鹿」の角は実際のものより、大きく描かれたり、装飾的に造形されて強調されていることがわかった。

以下、リュドミーラ・バルコワの「アルタイの古代遊牧民」から、拙稿にかかわる部分を紹介したい。

古代アルタイ人は、当時、発達した神話、豊かなフォークロア、さまざまなインド＝イランの信仰、土着の古代信仰および外国文化の借用を統一させた複雑な宇宙発生論的思想を持っていた。彼らには縦に三つの部分に分かれる世界の構造についてのはっきりした認識があった。それは上の世界―天、中間地帯―地、下の世界―地下である。古代アルタイ人は、自然を観察し、世界には対立する現象―誕生と死、暖と寒、明と暗が存在することに気づいていた。それらの現象は運動および対立する勢力の闘争について、周期性およびある状態から異なる状態への移行についての宇宙発生論的な理念の基盤となっている。それらの考え方は、造形芸術において動物の形で具現化されたが、具体的な動物の形ではなく、明確なイデーの持ち主の形で表現された。さまざまな猛獣像は、太陽・月・地球・生命の樹の象徴として登場した。それらは社会全体に理解されるイデーを持っていた。つまり、古代アルタイ人の思考、彼らの神話およびフォークロアは、文字のない民族の思想表現のための特殊な記号体系として形成されていた。

スキタイ・シベリアの世界全体に共通しているのは、生命の重要な起源としての太陽崇拝である。太陽・その輝き・光・熱・運動に関連するすべては神格化された。この広大な草原の世界の各地域で、独自の太陽の化身が生まれた。それは飛翔する鷺の姿や、疾走する黄金の角鹿の姿で表現された。ときには、天の太陽の運行を疾走馬と比較した²⁶。

アルタイの死生観が太陽信仰と結びついており、それが「飛翔する鷺の姿や、疾走する黄金の角鹿の姿で表現された」という。太陽信仰は、日没と日の出を繰り返す、死と再生のイメージがベースとなっている。「上の世界―天、中間地帯―地、下の世界―地下」という世界観は後述する馬王堆帛画につながるように思われる。馬王堆帛画もまた上・中・下に分けられているようにみえる。

四、周の鹿

『強国玉器』には、玉製の「鹿」が多く紹介される。強国は西周時期に現在の陝西省宝鶏あたりにあった国族だとされている²⁷。

「BRMI 乙:179 玉鹿²⁸」(図版 3-1)は、墓主人の胸腹の間におかれていた。角は4尖だが、左右対称ではない。左の角の先はパルメット状にみえる。「BRMI 甲:16 玉鹿²⁹」(図版 3-2)は、墓主人の頭頸部におかれていた。角は少し折れているものの左右対称にみえる。4尖である。頭を後ろに向け、振り返っている。この形は、後世の麒麟の図などによくみえる形である。「BRMI 甲:13 玉鹿³⁰」(図版 3-3)は、墓主人の左側の頭と頸の間におかれていた。角は左右対称ではない、折れていない角は6尖である。「BRMI 甲:14 玉鹿³¹」(図版 3-4)も墓主人の左側の頭と頸の間におかれていた。角は銀杏状の部分がある。「BRMI 甲:15 玉鹿³²」(図版 3-5)は墓主人の頭部におかれていた。角は左右対称でなく、銀杏状の部分があり、3尖と5尖にみえる。「BRMI 乙:180 玉鹿³³」(図版 3-6)は墓主人の胸腹の間におかれていた。角に関しては幹が太く、枝は繁るとされている。形は現実の角とは異なるように見え、6尖と8尖である。

いずれも角はかなり大きく強調されている。これらの角のうち、銀杏のような形に開いている部分やパルメット状の部分は、中国の戦国から秦漢の雲気文の形のもとになったようだ。また後述する秦の瓦当の文様にもよく似ている。

被葬者の頭部近くにおかれているのは、それだけ重要視されているからであろう。次に考察するが、玉蚕は被葬者の再生観念と結びつけられていた。角が強調されている玉の「鹿」も同様の意味があったのではないだろうか。

玉蚕

玉や石の蚕も数多くのこされている。ここでは、「BZM13:92 玉蚕、BZM13:93 玉蚕³⁴」(図版 3-7)を紹介する。西周墓葬中に、わりとよく見かけるものとされ、珍しいものではない。これは墓主の上腹部あたりにあったとされる。

山西省陽高にある古城堡古墳群の十二号墳から出土した蚕に関して、『蒙疆考古記³⁵』は以下のように記している。

水野(清一)氏は棺側に黒くなつた一寸餘りの虫がかたまつておかれてゐることを注意した。細長い毛虫のやうな形をしてゐるところから蠶に相違ないと考へられた。かつて京大の陳列館で金銅製の蠶の鑄物を見たことはあるが、かうして実物が入つ

てゐるのを目に見るのは初めてのことなのである。これはいふまでもなく、蠶が卵から幼虫となり、成虫となる過程を有することから、矢張り再生に對する神秘的な力をもつものだとの信仰が行はれた結果に外ならないのである³⁶。

ここでは「蚕」が「再生に對する神秘的な力」をもつとされている。『強国玉器』に紹介される「蚕」も同様に「再生」に関わるものであったのだろう。

鹿紋模（図版 3-8、9）

山西省の侯馬白店銅遺址で発掘された鹿紋模は東周の晋国のものだと考えられている。上下に凹槽（溝）があり、眼の部分と後ろ足の大腿部に丸い穴がある。そのため、これは鑄型ではないだろう。おそらく粘土か何かに型捺しするために用いたのであろう。

鹿は頭をめぐらし、大きな眼で、頭上には長い角が有り、痩せて長身で、前脚は跪き、後ろ脚は立ち上がり、尾は上に翹^あがっている³⁷。

と記されている。

ここでは疑問とされていないが、「鹿」であれば、このように尾が長いはずがない。また胴体もむしろ、ライオンのようにみえる。シルクロード・オアシスにみえるグリフィンによく似ている。このグリフィンは、「鹿」の角をつけ、猛禽類の顔をもち、ライオンの体をもっているのである。

五、印の鹿

前掲『中国古代の肖形印』（図版 4-1）、温廷寛編『中国肖形印大全³⁸』（図版 4-2）には、動物の肖形印が数多く収録されている。ここには「鹿」の印のみをあげたが、両書で重複している印は、わずかに一つのみであり、まだ他にも数多くあるのではないかと思われる。残念なことに、どちらも印の出所が明確ではないのだが、「鹿」はいずれも、その角が大きくあらわされて強調されているように見え、なかには中国の「鹿」ではなく、ヘラジカやトナカイの類のもののようにみえるものもある。これらはほぼすべてが白文印である。そのため、紙に朱で押しても、白いところが多く、あまり、イメージがわからない。これは本来、封泥として粘土に押すものであった。そうすれば動物の形が盛り上がり、毛筋まではっきりと見えるのである。新関欽哉氏は、肖形印は蠟模法で作ら

れているとし、「浮き彫りとなっている画像は粘土に捺してはじめて細部までわかる³⁹⁾」(図版4-3)、「いずれにしても肖形印が西方系統のものであることは全く疑いを容れない⁴⁰⁾」としている。

印は中国起源ではなくメソポタミア発祥である。文字の発明以前からすでにあり、粘土に押していた。楔形文字もまた粘土板を使用していたが、その文字は押すようにして書いていた。印は当初、スタンプ式のものであったが、その後、円筒型のものをローラーのように転がすものが多くなった。

中国のものは絵だけでなく、文字も記されている。清の呉式芬、陳介祺の『封泥攷略⁴¹⁾』は、封泥を集めて書物にした最初のものである。けれども、その書は文字資料を偏重し、絵の印である肖形印は一つも収録されていないのである。

六、戦国・秦漢の鹿

彩絵透雕漆座屏⁴²⁾ (図版5-1)

戦国時代の湖北省江陵縣望山一号楚墓のものである。外槨の内側から出土。鳳凰、雀、鹿、各4、蛙2、龍蛇35が格闘しあっている⁴³⁾。さきにみたようにスキタイの説明では動物闘争文自体が生命力のようなものを生み出しており、被葬者に力を与えていることになる。中国でも、そのような意識が、あるのかもしれない。ただ全体としては、墓に侵入しようとする悪霊としての蛇⁴⁴⁾を退治する図柄のようにみえる。孔雀などの鳥は、本来、蛇を食らうことが知られているが、ここでも、蛇を口に銜えている。「鹿」の場合は再生復活の意味をもっているのではないかと思われる。

彩絵朱地漆棺⁴⁵⁾ (図版5-2、5-4)

馬王堆漢墓の「鹿」である。「山の両側各有一白鹿、昂首騰躍、周圍繚繞雲紋」とされているが、左側奥の「鹿」については記述がない。なお白鹿は『抱朴子』対俗で「虎及鹿兔、皆壽千歲、壽滿五百歲者、其毛色白」とされている。

下半身が180度ねじれた鹿 (図版5-3)

前掲のスキタイの「鹿」は、胴の上半分と下半分が、180度ねじれた形で表現されている。この形はスキタイでは数多くあり、「韜の飾板 (図版1-4)」がそうである。中国でも注意すればいくつも見つけることができる。その一つがこの馬王堆の彩絵朱地漆棺の「鹿」である。大きな角をもち、下半身がねじれた形で表現されている⁴⁶⁾。スキタイ

の影響であろう。さきにみたように、この棺には白鹿がすでに二頭描かれていて、それにくわえてこの「鹿」なのである。西周の墓葬で玉鹿は被葬者の頭部近くにおかれることが多く、それは再生観念と結びつくのではないかと推定した。馬王堆でも棺に描かれた「鹿」は、被葬者をあの世に復活再生させうるものとして描かれたのではないだろうか。

画像石の仙鹿^{*47} (図版 6-1、6-2)

麒麟崗画像石墓には埋葬施設が南北に並んで3室築かれていた。この石は、そのうちの北室に柱として使われたもので、正面に鹿、側面に玄武を彫刻している。No.98と同様に、画面の余白部分を横方向に削り、図像を引き立たせている。正面の鹿は大きく発達した角をもち、振り返って目を開き、その先の地面にある何かをくわえようとしている。戦国時代の鎮墓獣には鹿角を生やす例があるなど、中国古代の人々は、鹿に何らかの霊力を求めたようである。また、東晋代に成立した道教経典『抱朴子』には、鹿の寿命は一千歳で、五百歳になれば体が白くなるとの説をはじめ、鹿に関する記述がみられ、長寿につながる縁起のよい生き物とされた。側面に彫刻された玄武は、亀と蛇からなる生き物で、四神のうち北方を司る神である。同墓からは鹿や玄武のほかにも、象や朱雀など多くの瑞獣が彫刻されている。漢代の上流層はこのような現実とは異なる世界を描いた空間に葬られていたのである。(市元)

図像は南北に三つ並ぶ墓室の北室の北の柱の正面に描かれ、側面には玄武があったという。かなり重要な位置にあったということであろう。『抱朴子』にみえる白鹿の長寿の話为例としてあげる。「長寿につながる縁起のよい生き物」「同墓からは鹿や玄武のほかにも、象や朱雀など多くの瑞獣が彫刻されている。漢代の上流層はこのような現実とは異なる世界を描いた空間に葬られていた」という解釈は墓の中に描かれるものの説明としては物足りない。被葬者は死者であり、墓室は閉じられた空間で、生者はそれらを見ることはない。そのため、「長寿」をことほぐ意味はない。そこから一步進めて、被葬者があの世に生まれ変わる復活再生観念あるいは、被葬者の魂の永世を願うものとみるべきであろう。なお玄武は、墓室の中で尸体に入り込もうとする蛇（悪霊）を防ぐ亀であろう^{*48}。

瓦当の鹿

瓦当と画像磚はよく似ている。いずれも型捺しで作られる。ここに紹介したものは、戦国晚期秦国瓦当、奔鹿紋瓦当（𪛗年宮遺址出土）（図版 6-3）、秦代瓦当、四鹿紋瓦当（阿房宮遺址出土）（図版 6-4）、鹿鳥昆虫紋瓦当（咸陽宮遺址出土）（図版 6-5）⁴⁹である。四鹿紋瓦当は鹿の体長以上に角が長く伸びている。

戯鹿画像磚⁵⁰（図版 6-6）

此磚的左方浮雕一男子、峨冠博袖、騎鹿行進、鹿張口奮蹄、形体高大。右方浮雕一女子、頭綰三髻、纖腰柔美、左手持花、右手持果、在鹿前作戲弄狀。反映了東漢時代富貴之家的間適生活。（馬修齊）

後漢の画像磚である。ここの説明では記されていないが、「鹿」に乗る一男子は被葬者であろう。右の女性は肩のところに羽のようにものが描かれているため、仙女であろう。花と果物をもつとされるが、左手にもつものは仙薬の芝にみえる。三本に枝分かれしており、日本で「三枝（さえぐさ）」とよばれるキノコのようにみえる。これを「鹿」、あるいは被葬者に食べさせるのであろう。そのことによって被葬者があの世に再生復活し、あるいは、その魂が永世となって暮らすことを願った図のように思われる。角の大きな「鹿」は再生復活観念とかかわっている。またそれに跨ることで、龍に乗るのと同様に、被葬者をあの世へと運ぶ役割をはたしていたのではないかと思われる。ここの「在鹿前作戲弄狀。反映了東漢時代富貴之家的間適生活」という解説には、そのような観点が欠けている。

騎鹿者⁵¹（図版 6-7）

図上一人（似女子）着寬衣袖長裙、騎在一只快步行走的鹿上。原磚的左端已殘欠、從图上女子回首後顧的姿態看来、左端好像還有其同行者。

これも四川省出土の画像磚である。「鹿」に騎るのは女性で、女性は後ろをふりかえっている。この女性も被葬者かもしれない。解説では、同行者の存在が推定されているが、前掲の画像磚の内容から推測すれば、それは仙人で芝草などの仙薬を渡そうとされているところではないかと思われる。戯鹿画像磚とよく似ており、本来、同じテーマで

あったように思われる。

七、鹿の角の造形

ここでは「鹿」の角だけが独立して大きく扱われている例をとりあげる。

長い角をもつ鹿のアップリケ^{*52} (図版 7-1)

中央アジアのパジリクから出土したものである。「鹿」の角とされているが、中国の雲気文や夔紋（夔龍文）によく似ており、中国で出土していれば、そのように命名されたかもしれない。最初から二つに分かれているのは、本来、角がもと一対であるからだろう。途中で細かく枝分かれし、現実の「鹿」の角とは異なっている。銀杏の葉の様な形や尖った突起状の形が複雑に入り組み、連続している。もとはヘラジカ系の角の形であろう。ここでは角だけが独立して文様化されている。それは角に再生の神秘をみただけであり、現実ばなれして長く伸びていくのも、その再生の力を強調してのことであろう。

秦の夔紋瓦当^{*53} (図版 7-2)

夔紋瓦当とされている。「夔」は龍の一種であり、この瓦当にあらわされる文様もそうだと認識されたのであろう。しかし、この文様は前述の「長い角をもつ鹿のアップリケ」によく似ており、一対の「鹿」の角のようにみえる。瓦当は完全に円形ではなく、半瓦当に近い。角は下の部分から枝分かれしながら、左右に分かれるように伸び、そのあと瓦当の枠にそって上向きに転じ、最上端で今度は下向きに折れ曲がり、その先端が、もとの出発点に近いところまで伸びている。これは瓦当の形状にあわせてのものであろうが、角のもつ再生の力を強調しているともみなせる。雲気文の中に無限に伸びていくようにみえるものがあるのは、同様の意味をもつのであろう。なお紋様系統に使用される「鹿」の角は、ヘラジカ系統の複雑な形のものが多く、「梅花鹿」のような角は少ないように思われる。雲気文の始まりが「鹿」の角であったと認識されないことの大きな理由は、ヘラジカ系統の鹿が中国の内部ではほとんど棲息していなかったからであろう。

秦の大瓦当^{*54} (図版 7-3)

かなり大きな瓦当である。解説では「夔紋」とされているが、この形は、さきにみたヘラジカ系の「鹿」の銀杏状の角の形の部分だけを取り出しているようにみえる。宮殿

の瓦当だとみなされている。

鹿角立鶴⁵⁵ (図版 7-4)

角は5尖である。鳥の頭のところから生えている。角および頭、頸部上には錯金の雲紋がある、とされている。「この異鳥は神話上の動物であるはずだが、いまのところその名称や意義がわからないので、しばらく鶴としておく⁵⁶」とあり、鳥は「鶴」とされているものの、よくわからないという。この鳥と「鹿」の角の組み合わせは、以下にみる漆虎座飛鳥の飛鳥と同じである。

漆虎座飛鳥⁵⁷ (図版 7-5)

東室から出土。鳳が虎の背の上に載っている形である。「鹿」の角は鳥の背に生えている形である。「鹿」の角の意味についての解説はない。鳥が被葬者を天界に運ぶものだとすれば、「鹿」の角は被葬者が再生復活して天界へ行くことを助けるためのものかもしれない。

同じ墓の東室から出土している漆羽人⁵⁸ (図版 7-6) は、鳳に載っている。羽人には両翼と尾羽が生え、口はすでに取りの嘴状に変化している。解説ではふれられないが、おそらく、これは被葬者が羽人に変化して再生し、天に昇っていく状態を示しているのではないか。

後漢、許慎 (58 ? - 147 ?) の『説文解字』匕部に、

眞、僊人、形を變えて天に登るなり⁵⁹。

とみえる。

後漢の時代の僊人 (= 仙人) のイメージは、形を変えるというものであったようだが、楚の羽人の形象と重ね合わせられないだろうか。いわゆる羽化登仙にあたるのであろう。

彩絵神人怪獣⁶⁰

これは前漢のものだが、漆を塗った亀甲の両面に人物が描かれている。一面の人物は被葬者の生前の姿で、反対側の面ではすでに神人となっているとされ、脚は鳥のようになっている。神人の下にいる獣は龍だとされ、それに騎って昇天しようとしているところだという。

漆羽人をこの彩絵神人怪獣と重ね合わせて解釈すれば、先のように被葬者が昇天しよ

うとしているところと考えることも可能であろう。

漆鎮墓獸⁶¹（図版 7-7）

西室から出土。四支の大鹿の角がついている。獸頭は二つあり、それぞれ、長い舌を垂らしている。舌出しは悪霊を祓うためであろう⁶²。鎮墓獸の役割からみて、この場合の角は武器の意味ではないかと思われる。

興味深いのは、「鹿」の角だけが独立して使用される場合、ヘラジカ系の「鹿」の角はまったくなく、中国に多い「梅花鹿」のようなものになっていることである。

八、楚帛画と銀杏状の角の形

楚帛画二種、帛画人物御龍図⁶³（図版 8-1）、帛画龍鳳仕女図⁶⁴（図版 8-2）は、いずれも被葬者の天界への昇仙を願う図のようにみえるが、龍の体と一体化している雲気文は、じつはヘラジカの角の一部の銀杏状の箇所似ている。この雲気は龍の体から生えているようにみえる。馬王堆帛画の龍も同様である。龍は魂を運ぶもので、雲気は実は鹿の角で再生を促すもの、それらの二つのものが合成され、威力を増しているのである。そのような目で被葬者の姿をみれば、衣服の下部の部分も、この銀杏状の角の形にみえてくるのである。

おわりに

以上、中国およびスキタイなどの「鹿」にかかわる造形について考察した。墓葬において「鹿」の造形はさまざまなところで使用されていた。その際、「角」がかなり強調され、大きく造形されていることが多かった。本論中に何度も繰り返して述べたように「鹿」の「角」は毎年、生えかわる。そこが「牛」の「角」などと大きく異なるところである。古代の人々は、そこに神秘的な力を感じたのであろう。古代の人々の死生観は現代とは同じではない。死後の世界は確実に想定されていたと思われる。そのことを明確にそして詳細に書き記した書物は戦国時代以前にはほとんど存在しないように思われる。しかし、墓葬に関わる図像や器物を丹念に読み解くことによって、その輪郭は捉えられるはずである。

古代の人々の絵や造形を現代的な芸術観だけで捉えようとすれば、大きな誤りを犯すことになるだろう。そもそも絵を描いたり、何かを作ったりするのは、それが実現する

ようにという、予祝の意味をもつことが多い。狩りの獲物があるようにと、洞窟に狩猟図を描くというのが、古代において絵を描く根本的な意味なのだろう。つまり呪術である。その際、狩りが成功するようにと言祝いでいたのだろう。「文字」が生まれる以前から「絵」や「造形」によって、それらのことが連綿と行われていた。また、そもそもスキタイには「文字」はなかったため、「言葉」と「絵」や「造形」によって死生観が表現されていたのであろう。

拙稿では、その観点から中国の墓葬に関わる絵や造形を呪術として捉えてみた。技術的、芸術的にいかにすばらしくても、その根柢には呪術がある。その観点から、中国の墓葬に関わるものを眺めてみれば、たとえば後漢の墓室に描かれる壁画は、墓主の生前の生活ではなく、生前と同じように暮らしたいと願う墓主の死後の生活であるはずである。

そう考えれば、「荊州天星観二号楚墓」の鳳の頭に乗る羽人は、被葬者が鳥へと形を変えて天界へと昇天しようとする造形であるといえる。同じ墓室の中にある「鹿の角」は、その変身を助ける呪具なのだろう。楚帛画や馬王堆帛画では、鳳などの鳥は少しわきにずれている。しかし、被葬者は、やはり、天空へと駆け上ることのできる龍に乗って昇天しようとしているのである。馬王堆の棺に「龍」とともに「鹿」が何頭も描かれているのは、被葬者が「仙人」へと変化して天界に再生することを助ける図像なのだろう。

後漢、王充（27-97 頃）の『論衡』道虚では、

夫れ蟬の復育を去り、龜の甲を解し、蚺の皮を脱ぎ、鹿の角を墮^おとすは、殻皮の物の殻皮を解し、骨肉を持ちて去り、尸解と謂う可し⁶⁵。

と、鹿の角を落とすことを尸解とみなしている⁶⁶。これをみると鹿の角が落ちることは、セミの幼虫が殻を脱いで羽化し、亀が甲羅を脱ぎ（これは誤り）、蛇が脱皮して（成長する）ことと同列に扱われていたことがわかる。鹿の角の場合は、また生えてくるので、死と再生のイメージと重ね合わせているのであろう。

これは王充の説だが、当時の人々も同様に考えていたのではないだろうか。

「ムースは毎年 30 キロのカルシウムを捨て⁶⁷」というのは、北アメリカ大陸の巨大なヘラジカについて述べられているが、その角が毎年、復活再生するということも含めての驚きのように思われる。このことは毎年、角を落としては再生復活する「鹿」一般についてもあてはまるだろう。

「鹿」の角のもつ再生復活イメージは、元来、中央アジアで大きく発展したものであ

った。この地方にはヘラジカの類も多い。そして「鹿」そのものの図像だけでなく、角の形だけ独立したものの文様化されていく。ヘラジカの角の文様化されたものは、中国の中心地域にその種の「鹿」が少ないことから、正確に「鹿」の角とは認知されなかったように思われる。中国でもその文様は盛んに使用され、文様そのものが増殖発展していくように見える。文様に復活再生という吉祥の意味があるならば、その文様が長く伸びていくことはよいことなのだろう。けれどもその文様は中国では早い時期から「雲気」と誤認され、のちには本当に「雲気」になってしまうのである⁶⁸。

一方、「鹿」の角自体も中国では戦国時代に復活再生を象徴する意味をもって使用されていたように思われる。それは本文で考察したとおりである。

以上、「鹿」の角および、そこから生まれ出た文様は生者に関してはもとより、被葬者の復活再生を助けるものとして、墓葬に関わるさまざまなものに使用されていくことになったと思われる。

※拙稿は、平成 24 年度科学研究費補助金（基盤研究）（C）（2）雲気文などの文様にみえる復活再生観念の研究にもとづく研究成果の一部である。

注

- 1 野崎誠近著、古亭書屋編訳、衆文図書、1979 年、『吉祥圖案解題：支那風俗の一研究』。
- 2 『中国美術全集 2 絵画編 原始社会至南北朝絵画』人民美術出版社、2006 年、5 頁、陰山壁画逐鹿図など。狩猟の様子を記す。陰山は内蒙古にあたる。
- 3 大槻文彦『大言海』、富山房、1933 年、志か。「夏ニ落チテ」とあるのは、他の記述と相違がある。
- 4 筆者撮影、2010 年 6 月 21 日、奈良公園。袋角が鹿茸の原料となる。薬とされるのも鹿の角のもつ再生復活力が根底にあるのであろう。
- 5 図のように、根元のところから落ちる。
- 6 『アニマ』3 月号、1984 年 2 月、平凡社、「特集 角のふしぎ」、今泉吉典、元国立科学博物館動物部長執筆部分。
- 7 前掲『アニマ』21 頁。必要部分のみを切り取った。「旧世界（ユーラシア）シカ類の適応放散。上下は分布の南北。左の種ほど草原性の傾向が強い」という説明がある。
- 8 林俊雄、興亡の世界史 第 20 巻、『スキタイと匈奴 遊牧の文明』講談社、2007 年、168 頁

- 9 同上。
- 10 拙稿「中國の死生觀に外國の圖像が影響を與えた可能性について—馬王堆帛畫を例として」東方宗教 110、2007 年、日本道教学会、拙稿「雲氣文と鹿の角」『形の文化研究』6 号、2011 年、拙稿「生命力をもつ文様の伝播：エジプトのパルメット、中央アジアの鹿角文様と中国の龍、雲氣文との関係について」論叢国語教育学、論叢国語教育学（復刊 2）、2011 年、広島大学大学院教育学研究科国語文化教育學講座等で取り上げた。本稿では、それらの基礎の上に、新しい知見をつけくわえた。
- 11 夏武平等□著、高耀亭等修□、第 2 版、科学出版社、1988 年。
- 12 王伯敏著、中野遵訳『中国古代の肖形印』東方書店、1985 年。
- 13 前 1 千年紀初ギラーン地方、磨研土器、高 34.5cm、天理大学附属天理参考館。シルクロード大文明展『シルクロード・オアシスと草原の道』奈良県立美術館、1988 年、219 頁。
- 14 前 4- 前 2 世紀、アゼルバイジャン地方、彩文土器、径 24.6cm、天理大学附属天理参考館。
- 15 前 7 世紀末 - 前 6 世紀初、クラスノダール地方、コストロムスカヤ遺跡、1897 年 N.I. ヴェセロフスキー発掘、金、縦 19cm、横 31.7cm、国立エルミタージュ美術館、2498/I 253 頁。
- 16 前 5- 前 4 世紀カザフ共和国、アルマアタ付近、イッシク・クルガン、1969-1970 年 K.A. アキシェフ発掘、金、縦 4.8cm、横 8.8cm、カザフ共和国科学アカデミー考古学博物館、MA37/43、37/44、253 頁。
- 17 前 5- 前 4 世紀、カザフ共和国、アルマアタ付近、イッシク・クルガン、1969-1970 年 K.A. アキシェフ発掘、金、縦 5.5cm、横 13.4cm、カザフ共和国科学アカデミー考古学博物館、MA37/48、254 頁。
- 18 前 5 世紀、クラスノダール地方、アディゲイ自治州、ウリャブ、金、銀、高 15.2cm、国立東洋諸民族芸術博物館、ウリャブ 81.1-36。255 頁。
- 19 前 1 世紀末 - 後 1 世紀初、モンゴル人民共和国、ノイン・ウラ、1924-1925 年、P.K. コズロフ発掘、羊毛、絹、縦 153cm、横 265cm、国立エルミタージュ美術館、MR-1956。
- 20 スキタイ・シベリア動物意匠、紀元前 5 世紀、木・皮革、長さ 23cm、幅 16.5cm ゴールヌイ・アルタイのパズィルィク第 2 号古墳出土、1947 年、S.I. ルデンコ発掘。前掲『エルミタージュ美術館特別名品展—神と人間—』64 頁。
- 21 スキタイ動物意匠、紀元前 7 世紀末頃、金、長さ 31.7cm 高さ 19cm 重さ 634g、ク

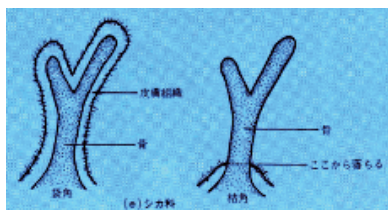
- ラスノダール地方プリクバニエのコストロマ古墳出土、1897 年 N.I. ヴェセロフスキイ発掘。『エルミタージュ美術館特別名品展—神と人間—』新潟県立近代美術館、1996 年、52 頁。
- 22 前掲『エルミタージュ美術館特別名品展—神と人間—』52 頁。
- 23 コバン文化、紀元前 1000 年紀中葉、ブロンズ 高さ 17.4cm、カムンタ村（北オセチア）出土。前掲『エルミタージュ美術館特別名品展—神と人間—』50 頁。
- 24 スキタイ・シベリア動物意匠、紀元前 5 世紀、木・皮革、長さ 11.5 × 6.0cm ゴールヌイ・アルタイのパズイルイク第 2 号古墳出土、1947 年、S.I. ルデンコ発掘。前掲『エルミタージュ美術館特別名品展—神と人間—』65 頁。
- 25 スキタイ・サカ様式、紀元前 5 世紀-4 世紀 フェルト (1) 110 × 80cm (2) 87 × 75cm ゴールヌイ・アルタイのパズイルイク第 5 号古墳出土 1949 年 S.I. ルデンコ発掘。前掲『エルミタージュ美術館特別名品展—神と人間—』69 頁。
- 26 前掲『エルミタージュ美術館特別名品展—神と人間—』36-37 頁。
- 27 『強国玉器』、文物出版社、2010 年、李伯謙氏の序文より。
- 28 前掲『強国玉器』140 頁、長 7.2、高 8.8、厚 0.4 厘米。
- 29 前掲『強国玉器』140 頁、長 6.3、高 3.3、厚 0.4 厘米。
- 30 前掲『強国玉器』38 頁、長 9、高 4.8、厚 0.3 厘米。
- 31 前掲『強国玉器』40 頁、長 5.8、高 4、厚 0.3 厘米。
- 32 前掲『強国玉器』41 頁、長 4.2、高 3、厚 0.2 厘米。
- 33 前掲『強国玉器』142 頁、長 4.4、高 6.9、厚 0.4 厘米。
- 34 前掲『強国玉器』331 頁、均長 3、寛 1、厚 0.5 厘米。
- 35 小野勝年、日比野丈夫、学芸社星野書店、1946 年。
- 36 同上 286-287 頁、蠶の埋葬。
- 37 H21、5 鹿紋模、紅褐色、残。長条状、面弧凸、塗黒色物、背部凹凸不平、鹿回首、大眼、頭上長角、瘦長身、前腿下跪、後腿站立、尾上翹、紋飾上下有凹槽。残長 6、高 6、厚 2.2 厘米 (図二五八、3; 図版一五〇) (『侯馬白店鑄銅遺址』山西省考古研究所、科学出版社、2012 年)。
- 38 山西古籍出版社、1995 年。
- 39 新関欽哉『東西印章史』東京堂出版、1995 年、43 頁。
- 40 同上。
- 41 中国書店、1990 年、清光緒三十年版影印。
- 42 戦国中期、長五一・八厘米、下寛一・一一厘米。湖北省江陵縣望山一号楚墓出土、

- 湖北省博物館蔵。前掲『中国美術全集』43 工藝美術 漆器。
- 43 アサヒグラフ臨時増刊、1973 年 6 月、中華人民共和国出土文物展の説明。
- 44 拙著『魂のありか』角川書店、2000 年、212 頁、死者の体内に入りこむ蛇を参照。
- 45 西漢早期、長二三〇厘米、寛九二厘米、通高八九厘米、湖南省長沙市馬王堆一号漢墓出土、湖南省博物館蔵。
- 46 前掲「雲気文と鹿の角」でとりあげたため、ここでは簡単に紹介する。『長沙馬王堆一號漢墓』上集、湖南省博物館編、文物出版社、1973 年、図二五。
- 47 石製 / 高 59.5、幅 32.9、厚 29.5、南陽市麒麟崗 12 号墓出土 (1988 年)、後漢時代 1 ～ 3 世紀、南陽漢画館。『誕生 中国文明』東京国立博物館、読売新聞社 2010 年、130 頁。
- 48 前掲『魂のありか』216 頁、玄武を参照。
- 49 前掲『中国美術全集』雕塑編秦漢雕塑、2-3 頁。戦国晚期秦国瓦当、奔鹿紋瓦当 (蕪年宮遺址出土) (図版 6-3)、秦代瓦当、鹿鳥昆虫紋瓦当 (咸陽宮遺址出土)、四鹿紋瓦当 (阿房宮遺址出土)。
- 50 東漢、磚質、高二五厘米、長四五厘米、厚五厘米、出土於四川彭山義和郷、新都県文物管理所蔵。『中国美術全集』雕塑編秦漢雕塑、人民美術出版社、2006 年、136 頁、図版説明、49 頁。
- 51 劉志遠『四川省漢代画像磚芸術』四川省博物館研究図録、中国古典芸術出版社、1958 年、(20 × 25 公分)。
- 52 加藤定子『古代中央アジアにおける服飾史の研究：パジリク文化とノイン・ウラ古墳の古代服飾』東京堂出版、2002 年、74 頁、図 I-1 - 3 - 11、第 2 號墳出土男子用毛皮製外衣の背面 (ルデンコ、1953:No.92-2)。
- 53 陝西省考古研究所秦漢研究室編『新編秦漢瓦当図録』三秦出版社、1987 年、1 頁、秦夔紋瓦當、秦始皇陵、面径約 60 厘米。
- 54 『始皇帝と彩色兵馬俑展—司馬遷『史記』の世界』TBS テレビ、博報堂、2006 年。秦 (前 3 世紀) 咸陽市興平県黄山宮遺跡出土、高 73cm、幅 76.8cm、厚 10cm、陶、陝西省考古研究所。
- 55 戦国早期、高一四二厘米、一九七八年湖北隨縣擂鼓墩出土、湖北省博物館蔵。前掲『中国美術全集 40 工藝美術編 青銅器 [下]』72 頁、解説 31 頁。
- 56 同解説 31 頁。
- 57 N12:31 側視図、通高 134 厘米。前掲『荊州天星觀二号楚墓』190 頁。
- 58 M2:60 前掲『荊州天星觀二号楚墓』解説 181 頁。

- 59 眞、僊人變形而登天也。
- 60 彩絵神人怪獣紋亀甲形漆盾 西漢早期、長三二厘米、寬二〇.一厘米、湖北省江陵縣鳳凰山八号漢墓出土、荊州博物館藏。『中国美術全集 43 工芸美術編 漆器』17 頁、彭浩氏解説。
- 61 M2:240 正視図、復原高、117 厘米。『荊州天星觀二号楚墓』、湖北省荊州博物館、文物出版社、2003 年、189 頁。
- 62 前掲『魂のありか』張目吐舌参照。
- 63 前掲『中国美術全集 2 絵画編』51 頁。
- 64 前掲『中国美術全集 2 絵画編』50 頁。
- 65 夫蟬之去復育，龜之解甲，虵之脫皮，鹿之墮角，殼皮之物解殼皮，持骨肉去，可謂尸解矣。
- 66 もっとも、王充は人が尸解して仙人となるという觀念に反駁するために、これらの例を挙げている。
- 67 前掲『アニマ』14 頁、「角の進化史」文/V・ガイスト 訳/太田啓典。
- 68 前掲拙稿「雲気文と鹿の角」参照。



0-1



0-2



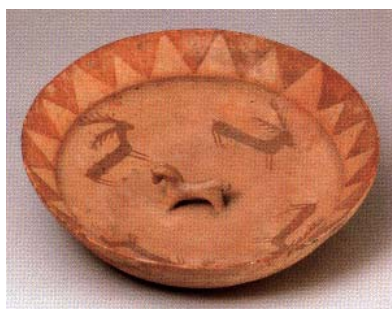
0-3



0-4



1-1



1-2



1-3



1-4



1-5



1-6



2-1



2-3



2-2



2-4



2-6



2-5



3-1



3-2



3-3



3-4



3-5



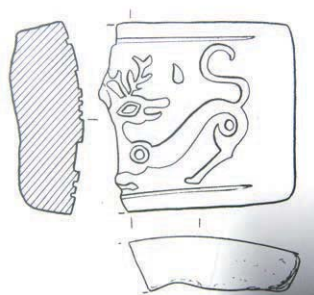
3-6



3-7



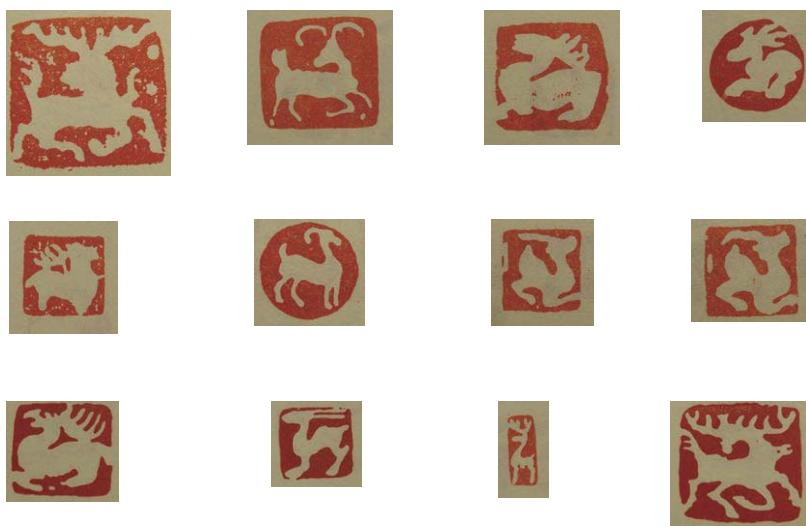
3-8



3-9



4-1『中国古代の肖形印』



4-2『中国肖形印大全』



4-3『東西印章史』
上の印の封泥
に見える



5-1



5-2



5-3



5-4



6-1



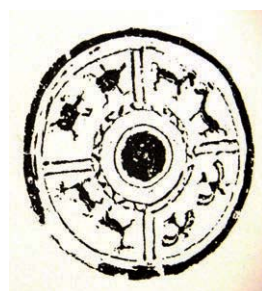
6-2



6-3



6-4



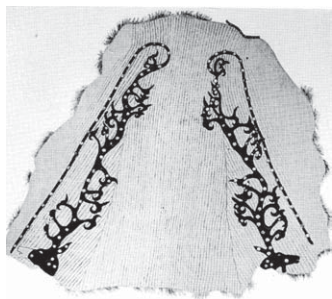
6-5



6-6



6-7



7-1



7-2



7-3



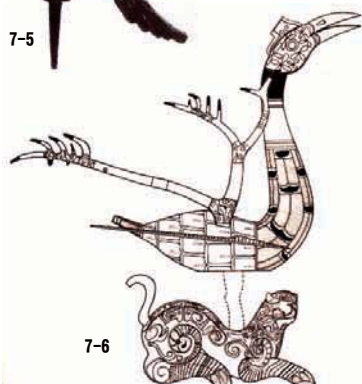
7-7



7-4



7-5



7-6



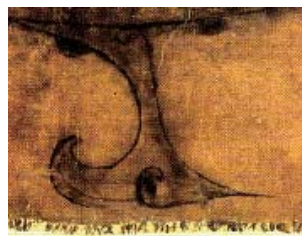
3-2の一部



3-5の一部



8-1



8-2

